

鏡の記憶をめぐる

ハーン、チェンバレン、ジェイムズ夫人の「松山鏡」を例として

川澄亜岐子

はじめに

本発表は、ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）が日本で著した2冊目の著書である『東の国から』（*Out of the East*, 1895）から「松山鏡」の話を取り上げて、彼の再話の方法を検討したものである。「松山鏡」は、「博多にて」（“At Hakata”）という随筆に作中作として紹介されている。もとはインドの民話に由来する話で、日本では落語や能、狂言などの演目で知られる。その内容は笑い話から教訓譚まで様々だが、ハーンはこれを母と娘の絆を描く物語として再話した。それは次のような話である。

越後の松山に暮らす侍が都での任務を済ませて帰郷した折、都の土産として妻に鏡を贈った。妻は鏡に映った自分の顔を見て驚き、鏡を片付けてしまう。その後、重い病にかかった妻は枕元に娘を呼び、「朝夕二回、これを覗けば私に会える」と言って、夫から贈られた鏡を渡す。妻の死後、娘は遺言通りに鏡を覗き、そこに映る自分の顔を母親だと思って話しかける。それに気づいた侍は理由を尋ね、娘の話を聞くと涙が止まらなかった。

「松山鏡」の先行研究では、鏡に宿る不思議な力とそれに対するハーンの関心を認める点でおおむね一致する。平川祐弘は、「鏡や水に写るイメージにまつわる話は、神話と化して永く伝承されてきたにちがいない。

〔中略〕その種の神話的伝統が西洋文学にも底流しているからこそ、ハーンも鏡にまつわる日本の伝説に思いをいたすようになったのではあるまいか」と述べて、ハーンの「松山鏡」が西洋文学の影響したで書かれた可能性を指摘する（平川 228）。また、仙北谷晃一や大貫徹は、鏡を通して亡母に対面していると信じる娘の心情に注目して、そこにハーンが生涯、抱き続けた母親への思いを重ねる（仙北谷 19；大貫 40-41）。これらの研究は、「松山鏡」の内容に関する言及が中心で、原話の特定や再話との関係については十分に検討されていない。本発表では、ハーンの再話と二種類の前話を比較して共通点と相違点を整理し、ハーンの再話とそれぞれの原話の関係性を具体的に示した。そして、ハーンの「松山鏡」が「博多にて」という作品全体主題とどのように関連するのかという問題についても検討を加えた。

ハーンの再話と先行作品の関係

「博多にて」において、ハーンは二種類の前話を挙げて「松山鏡」の話を紹介する。一つは縮緬本で、ジェイムズ夫人の *The Matsuyama Mirror* ([1886]) である。ジェイムズ夫人はイギリスの女性で、海軍兵学寮の教師を務めた夫とともに、1876年から1896年頃まで日本に滞在した。縮緬本は和紙を縮緬状に加工して和綴りで製本した書物で、日本の土産物として外国人の間で人気を博した。とくに日本の昔話を英語やフランス語などの外国語に翻訳し、多色刷りの挿絵を添えた *Japanese Fairy Tale Series* という絵本のシリーズがよく知られるが、ジェイムズ夫人の *The Matsuyama Mirror* も同シリーズの一冊として刊行されたものである。

もう一つはハーンの友人で、著名な日本研究者であるチェンバレンが編んだ *A Romanized Japanese Reader* (1886) である。これは英語圏の日本語学習者のための読本で、日本の民話や伝説などが集められている。全体はローマ字で表記された日本語の原文とその英訳、それに文法や語彙などを解説した語彙集という三巻から成る。

ジェイムズ夫人、チェンバレン、ハーンという三種類のテキストを比較すると、話の展開に大きな違いは見られないが、情報や描写の精度はそれぞれで異なる。具体的には、もっとも分量が多く、内容も詳しいのがジェイムズ夫人の縮緬本で、次いでハーンの再話、そしてチェンバレンの参考書という順番である。なお、チェンバレンの参考書は、話の筋だけが簡潔にまとめられており、物語というよりも概要と呼んだ方が適当である。

まずハーンとジェイムズ夫人のテキストを比べてみると、ハーンはジェイムズ夫人の縮緬本にある複数の描写を削除したり変更したりすることで、物語の主題を変更していることが分かった。具体的には、ジェイムズ夫人の縮緬本には、侍が都に上る時、夫を見送る妻の心情が詳しく語られているが、ハーンの再話ではそのくだりが削除されている。また、ジェイムズ夫人の縮緬本において、病に倒れた妻が病床で家族を残して逝く無念が語られる箇所も、ハーンの再話には採られていない。加えて、妻が鏡を片付ける理由も、ジェイムズ夫人の縮緬本とハーンの再話では理由が異なる。総じて、ハーンはジェイムズ夫人の縮緬本の妻の心情に関する箇所に手を加えているが、唯一、夫の土産が説明される箇所は、ジェイムズ夫人の縮緬本よりもハーンの再話の方が詳しい。これは、ハーンの再話が原話の文章のみならず、挿絵も参照したためである。

続いて、ハーンとチェンバレンのテキストを比べてみると、ハーンは多くの語彙や表現をチェンバレンの参考書に拠っていることがわかった。さらに詳しく見てみると、ハーンが参照したのは、チェンバレンの参考書にあ

る「松山鏡」の英訳だけでなく、むしろ語彙集の方であることが明らかになった。たとえば、母親の死後、娘が鏡を覗いて亡母に話しかける様子は、ハーンの再話で“having the heart of meeting her mother” (Hearn 62-63) という表現が用いられている。チェンバレンの参考書の語彙集には“having the heart (i. e. sensation) of meeting” (Chamberlain 3: 45-46) という文言が見られ、ハーンの用いた表現と酷似している。さらに、チェンバレンの参考書ではこれは“*Au Kokoro shite*” (Chamberlain 1: 45-46) という日本語に該当することが説明されている。同様の例は父親が娘の話を聞いて涙を流すという結末の場面も見られる。このことから、ハーンはチェンバレンの参考書にある表現を自身の作品に取り込むことで、日本語という言語が持つ手触りを自身の作品の中に再現しようとしたのではないかと考えられる。

「博多にて」における「松山鏡」

しかしながら、ハーンはジェイムズ夫人の縮緬本とチェンバレンの参考書を単純に組み合わせただけで再話を行ったわけではない。ハーンの再話には、娘の人柄に関する情報と妻が鏡を片付けた理由の2点に、他の二つのテキストには見られない独自の特徴が確認できる。前者に関しては、ジェイムズ夫人とチェンバレンの両方のテキストにおいて、娘は孝行娘として設定されているにもかかわらず、ハーンの再話では、娘の人柄に関する一切の情報が省かれている。また後者についてはチェンバレンの参考書には記述がないものの、ジェイムズ夫人の縮緬本には、娘が鏡を見たらうぬぼれるのではないかという心配から、侍の妻が鏡を片付けたことが語られる。これに対してハーンの再話では、鏡を夫の愛情の証と捉えた妻が、他人の目に触れさせたくないために鏡を隠したことに変更されている。これらの変更は、「博多にて」という随筆全体の主題とも関わると思われる。

「博多にて」では、語り手が博多の街で目にした大量の鏡が導入となって、「松山鏡」が紹介される。この時、寺の境内に無造作に積み上げられた鏡は檀那寺の鐘を新造するために檀家から寄付されものである。語り手は多くの鏡が寄付されたところに人びとの信仰心を認めつつ、僧侶たちの一存で大量の鏡が失われることを嘆く。語り手は「鏡は女の魂」 (“*The Mirror is the Soul of the Woman*”) という諺を引き合いに出して (Hearn 60)、鏡が持ち主の人生にどれほど深く関わっているのかを示したうえで、「松山鏡」を紹介するのである。

ハーンの「松山鏡」から娘の人柄に関する情報が省かれているのは、親孝行という利他的な行為が「博多にて」の主題と矛盾するからである。さらに、鏡が隠された理由が変更されたのは、母が娘の虚栄心を戒めるという原話の教訓的な理由よりも、鏡を通して母娘の絆を描く方が物語として美しく、読者の共感を得やすいという判断が働いたのかもしれない。つまり、ハーンの再話は原話の孝行譚という主題を180度転換させ、個人の幸福が共同体によって脅かされることを逆説的に批判しているのである。

結論

本発表では、ハーンの「松山鏡」を二種類の原話と比較して分析してきた。その結果、物語の内容は大筋でジェイムズ夫人の縮緬本に拠りつつ、語彙や表現の点ではチェンバレンにより多くを拠っていることが明らかになった。とりわけ、チェンバレンの参考書のうち語彙集と関連が深いことは、ハーンが日本語の持つニュアンスを自身の作品に再現しようとしたことを示唆するものと思われる。

ハーンの再話の方法を具体的に示したことに加えて、英語で書かれた原話に着目したことも本発表の意義である。ハーンには日本語で書かれた作品をもとにした再話が多いが、その中にあって、同時代に日本に滞在した外国人の著作を原話にした作品は珍しい。従来、ハーンの日本研究は自身の生活経験や日本語資料が優勢であると語られてきたが、今回の発見により、ハーンが外国人による最新の日本研究や日本に関して発信した情報にも敏感に反応していたことがわかり、彼の情報源の多様性が明らかになった。

主要参考文献

Chamberlain, Basil Hall. *A Romanized Japanese Reader: Consisting of Japanese Anecdotes, Maxims, etc., in Easy Written style; with an English Translation and Notes*, 3 in 1 vol. London: Trübner & Co., [1886].

Hearn, Lafcadio. *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 7. Kyoto: Rinsen Book Co., 1973.

James, T. H. *The Matsuyama Mirror*, Japanese Fairy Tale Series, no. 10, Tokyo: Hasegawa [1886].

石澤小枝子『ちりめん本のすべて——明治の欧文挿絵本』（三弥井書店、2004年）

箱崎昌子「ちりめん本「日本昔噺」シリーズ“THE MATSUYAMA MIRROR.”（『松山鏡』）考——鏡をめぐる騒動から家族愛の物語へ——」（『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』第7号、2009年、13-20頁）

平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』（ミネルヴァ書房、2004年）

宮尾與男編『対訳日本昔噺集 明治期の彩色縮緬絵本』全3巻（彩流社、2009年）